環菜（かんな）と一番（いちばん）

友利（ともり）　新菜（にいな）

いつかの日。あるところに、学校があった。そこには、中学二年生の「中原環菜」という、学年、いや学校一の優等生がいた。環菜は、完ぺきを求めていて、いつも完ぺきな中学生であった。

しかし、完ぺきなんてこの世にはそんざいしない。なんと環菜がテストで七十点をたたき出してしまったのだ。こんな結果をクラスのみんなに言うわけにもいかず、その日はずっと暗い気持ちでいた。

そして数日後。環菜は思い切ってお母さんにそのことを言った。すると、

「あら。めずらしいね。でも、心配しないで。失ぱいはだれにでもつきもの。自分のできるところまでできているのなら、それはそれでいいじゃない？」

それを聞いた環菜には、なぜそれでよいのか、全く理かいすることができなかった。それを見て、

「そんなに気になるのであれば、世界を一周

して、ちょっと気をらくにしてみない？　かわいい子には旅をさせよ、だしさ。どう？」

環菜はそうして世界一周の旅に出たのだった。

数週間して。環菜は飛行機に乗り、最初の目的地に行こうとすると、

「すみません。とつぜんなんですが、ごいっしょに旅に行かせてもらってもかまわないでしょうか？」

と、見ず知らずの女の子に声をかけられた。でも、環菜は一人では心細かったので、同行してもらうことにした。

〜韓国へん〜

そして着いたのは韓国。二人とも、目をかがやかせて見ている。

「私、韓国にあこがれているんです。ですから、今とってもうれしいです」

と言うのは女の子。そういえば、と思って

名前を聞くと、小学六年生の「河合優亜（ゆあ）」というらしい。

そうしてしゃべりながら行くのは「南大門市場」。

南大門市場に着いてまず目につくのは店の多さ。九千三百軒にもなるそう。二人が行ったのはそうざい店。行くと、店の方に声をかけられた。

「あなたたち、日本人でしょう。なにか用があって来たよね。用を教えてくださいな。なやみでも良いわよ」

急に聞かれて二人はびっくりしましたが、じじょうを説明すると、

「そうなのね。ううん、私は、一番じゃなくても、自分の中の一番にもなれるし、べつにいいんじゃあないかしら」

それを聞いた二人は顔を見合わせて、

「そうなのかなあー」

と言いました。そして環菜は、自分の中の一位って、一番ってなんなんだろうと思った。

～フランスへん～

また飛行機に乗って着いたのはフランス。環菜は「フランスは世界一観光客の多い国」というじょうほうがあったのを思い出し、わくわくしていました。向かうのはパリのエッフェルとう。着いたところで一休みしていると、「すみません」と声をかけられた。環菜はそうされて、おどろいてしまった。話を聞くと、環菜と優亜が子どもだから、可愛くて声をかけてしまったらしい。ここに来たじじょうを説明すると、

「やっぱり可愛いね。あなたたちは子どもだから分からないかもだけど、よく考えたら小さなことだし、それだったら、あなたに勝つことのできないみんなの心はどうなの？」

そう言われて、環菜はドキッとした。なぜなら今まで自分が一番になれればそれでいいと思っていたのに、そう言われて、

「たしかに、みんなは一番になれなくて、こんなにくやしかったのだろうか」

という気持ちになった。それはとても心が動かされたということなのだろうなと環菜は思った。

〜カナダへん〜

またまた移動して来たのはカナダ。カナダならメープルシロップといきたいところだが、ナイアガラのたきだ。二人はナイアガラのたきを見て、今なにを目的としているか、忘れるぐらいにあっとうされた。環菜はそれを見て、

「フランスの人が言っていたように、よく考えたらこれも小さななやみ。しかも一番だなんて目ざさなくてもいい。なんたってここはカナダで一番人気のある所だし、自分の中だけでもいいよね」

と改めて感じた。

～帰国して～

そして日本に帰ってきた環菜と優亜。空港で二人は別れをつげてそれぞれ自たくに帰って行った。

家に帰った環菜はいままでの世界一周の旅のことをふり返ってみた。すると会った人々の話を思い出した。それを思い出すと、一位じゃなくても、がんばっていればそれでいいけれど、がんばりすぎもよくないということを思い出した。そう思うと、ほっとしたような、いままではなんだったのかと思うばかり。だけど大じょう夫。ということをしんじて環菜は生きていくのでした。